

昭和二十四年七月二十五日三行發行

(每月一回・便物認可)

(通第一五五号)

# 慈光

目次	
帰命の一念	近角常観 (1)
太子様を仰ぐ	福島政雄 (5)
堂の鈴	
一道会の記	佐藤強三郎 (11)
	榎原徳草 (16)

第十四卷 第二号

# 帰命の一念

(二)

蓮如上人の「後生助け給え」の意義

近角常観

私はいつも受け心を言わぬ

一 私はお話するのに、いつも受け心を言わぬ、お見捨てなき御真実だけを言うことにしている。これは何故かと云うと、私の申す信心に受け心が無いからではない。人に物を与えるに、これをやるから有難いと言えということはない。有難いとは、与える物が真実の物なら、ひとりでに必ず起つて来るからであります。

二 併しこれが間違ひ易いところ故、よく申しておかねばならぬ。私がやゝもすると、悪くても浅聞しくとも、仏がよくして下さるのだからと、受け心の無いことに取つてしまわれることがある。これでは私の思いは届いて居ぬのであります。

道楽者の父が、子供の金を浪費するのが可哀想ながらとて、広く功德の宝藏を開いて何程でも下さるのに「親はどれ程でも呉れるのだから」となれば、受け心の無い信心となる。この道楽者を、誰も言葉もかけてくれる者が無いのに、

その言葉のかけてくれても無くなつたのが益々可哀想で、親は弥々なさけを加えて下さる思召であつたかとなると初めて親心の受けられたこととなるのである。而してその親心の受けられて、親のお慈悲に初めて頭の下つた処が、一念帰命となるのであります。

古来帰命に三説ある

三 これは余り申さぬでありますけれど、古来帰命に三説がある。中には帰命を翻訳して、ティク、レフユーリジともある如く、隠家を取る、という意味に言うものもある。けれども先ず大体に於いて、「はは命を捨てるという意味にいうのである。これは本当に命を捨てるのである。文字の意味の取りようだけでなく、眞に命を捨てるのである。もつと善くせんならん／＼と誠を尽して、遂に命を捨てるまでやる。極端にいようと、多くの人の中には『眞實にせんならん／＼』、『こんなことではいかぬ／＼』と終に實際に命を捨てるまでやられるかたすらあるのである。これは飽くまで自ら誠にせんとする眞面目にやる方の例なのであ

る。

四 又一つは、命に帰る、と読むのがある。それは仏の命に帰ると読むのである。仏の命に帰るとなると、さとりのようになつて、それは私を助けると仏が現れて下されたの故、仏の方で私を救いとつて下さるのである。故に、我等に於いては、信仰を獲るのなんと、むつかしく言うのが間遣いで、我等は仏の命に帰ればよいというのであつて、これだと余程さとり風の帰命となる。

即ち、石童丸が辛苦艱難して親をさがすのが、前の命を捨てる方の帰命なれば、現在我等が斯うやつてあるのが、仏の救いの中にあるのだとなると、今の命に帰る方の帰命である。処でこの二つが、どちらも本当の安心にならぬ。一方は、血を吐く思いでやつてく、やり抜いて安心がならず、他方はこれも恵み、あれも恵みと、自分の煩惱生活をゆるし、放任して置いても、本当の安心は來たらぬとなる。

帰命とは本願招喚の勅命なり

五 すると、本当の所はどれであるか。今の『私の悪しきを善くして』でもなく、又『悪いまんま』でもなく、その悪しきを哀れむ親心として、『汝の悪しきを悪しく思わぬのだぞ。

その汝を飽くまで捨てぬのだぞ』

この、本願招喚の勅命に帰する、この帰命である。これになると嚴肅にして恰も、陛下の勅命を聞くの思いであります。

六 これを私の譬たとえでいうならば、先達ての如き風水害の際に、陛下よりわざ／＼待従じゅうとうをつかわしてお見舞い下さるとなる。陛下の御勅使をお迎えするのだから、席を清め、威儀けいぎをととのえ、礼を全くしてと、それに気をもむとなれば、これは命を捨てる方の帰命である。イヤ既に風水害で仕様がなくなつてゐるのであるから、綺麗に迎えんならんのであるけれども、それは出来ぬ。その出来ぬをお見舞い下さるのであるれば、出来いでもかまわぬのじや、出来ぬのを救うて下さるのであると、自ら恕してやつて行く方になれば、今の命に帰る方の帰命となる。これでやつて居つても、そうちは自ら許して居るもの、中心からの安心は出来ぬとなる。

七 すると、いよ／＼陛下の勅命は如何。『汝自身を考

えて見よ。善くせぬならぬならぬのだと云うて居るも、眞の大御心を知らぬのであれば、悪くてもよいのだと云うているのも、思召の程を聞かぬのである。全体汝が、風水害に悩んで居る故、それを哀れに思召されてのわざ／＼の御救い』であれば、この時に於いて、「礼をつくさんなら



けてただ／＼この勅命を承る一つであると。

それ故、親鸞聖人は

「帰命と言ふは、本願招喚の勅命なり」

こは、併し、信仰としては、どうしても、これでなくてはならぬのである。

勅命を外にして如來の説明は出来ぬ

一四 そこで青年の諸君は、その言う處の如來とは如何、本願とは如何。すぐここでこれを言われるのであるけれども、これが説明出来る位ならば、他力ということは無

## 太子様を仰ぐ

### 一 平和を目指して

太子様と言えば直ちに聖徳太子の御事であると合点するのは我々日本国民であります。その太子様を仰ぐ心持から、その御精神について述べさせていただきます。その第一に太子様は平和の天使ともいうべき御方であつたということを申し述べたいとおもいます。

も包含したものと言つても宜しいかも知れません。キリストの教には排他的の面が大にあります、太子様の御教は法華經を根本とする大包含の精神に充ち満ちています。

太子様が御幼少の時から聰明な御方であつたということは、日本書記でも法王帝説でも述べられてあるのであります。もつとも一度に八人とか十人とかの訴えを御聴き分けになつたというのは、豊聰耳<sup>とよとみ</sup>という御名から作り出した伝説でありましよう。二十才を超えさせられてから朝鮮から渡來の僧慧慈<sup>えいじ</sup>からは仏教のことを学ばれ、覚智<sup>かくち</sup>からは、仏教以外の典籍をお学びになつたことは事実であります。

聰明な太子様が日本國の推古天皇の皇太子攝政として先ずどんなことをなされたのでありますか。その第一のこととして推古天王の御代と戦争平和との関係を見れば如何でしょうか。天皇の八年には新羅と任那との問題が起つて、新羅の五つの城を改めて取りました。九年には新羅のスパイを捕えて上野国に流し、十年には太子様の御弟の来目皇子が将軍に任せられ九州まで行かれましたが、御病氣で中止となり、十一年に来目皇子はおかくれになりました。そこでその御兄の当麻皇子<sup>たまさき</sup>が征新羅將軍に任せられました。併しその御妃の舍人姫王<sup>とりひめ</sup>が赤石でお亡くなりにな

くなつてしまふのである。陛下の勅命喚發といえども、即ち、その事によつて大御心の程はあらわれて来る。同じよう今現に私共が承る處の本願招喚の勅命、これを外にして如來といふことも、本願といふことも、言ふことは出来ぬ。然し、唯喚發だとその事柄で頂くのではなくて、そのわざわざ喚發して下された親心の御眞実、これを頂くと、その一念に『有難う御座います』と、思召のほどに徹底するとなつて来るのである。而してその徹底の一念に腹底よりその御眞実一つに満足せしめられて、即ち摂取不捨といふことになつてくるのである。

### 福島政雄

太子様の御誕生や御幼少の時の御事については色々の伝説が伝えられています。既において御生れ遊されたといふ伝説は、キリストの誕生の伝説が中國から景教によつて我が國に伝えられたものが、太子様の御誕生に附会されたのであると、久米博士は言つておいでになりますが、これは面白い説であります。太子様は宗教的偉人であらせられます。キリスト以上の大人物であらせられます。キリストを

り、征討のことはまだ中止となりました。その後太子様の御存生中遂に征討のことは行われませんでした。太子様がおかくれになつた後に推古天皇の三十一年にまた新羅征討のことが行われています。

太子様は平和を目指しておいでになります。十八年に新羅の使が来て、その接待のことが行われています。それで戦争するということは何時間にか止められて、やがて平和の外交が行われるようになつたようであります。そして文化的交渉が盛んに行われています。三年に高麗の僧慧慈<sup>えいじ</sup>百濟の僧慧聰<sup>えいのう</sup>が帰化したことを初として、翌年には法興寺が建立せられ、五年には百濟の王子阿佐の朝貢があり、九年には太子様の宗教生活の中心ともいふべき斑鳩の宮の造営があり、十年には百濟の僧觀勒<sup>かんらく</sup>が曆本や天文地理の本などを伝え、十一年には太子様が泰河<sup>たいか</sup>勝に仏像を賜ることがあり、冠位の制定があり、十二年四月には十七条憲法が制定せられました。その秋九月には朝廷での礼式を定められました。

此の十七条憲法のことはあとで委しく述べますが、これは太子様が大乗佛教に心をひそめたもうた結果として、その御心にはつきりとなつた日本國の自覺の現れであります。眞実の日本國はかくあるべきものと御自覺になつたのであります。十三年には鞍作ノ鳥に命じて仏像を作らせ

られ、十四年には一丈六尺の仏像を元興寺の金堂にすえられました。そして此の年に始めて仙誕会と盂蘭盆会を行われました。これは注目すべきことであります。また此の年の五月には鞍作ノ鳥を厚く賞せられ、七月には太子様御自身で勝鬘經を宮中において御説きになり、後にはまた岡本宮で法華經を説いたものであります。此のようにして十五年以後は唐との直接交渉が行われ、十八年には高麗の疊徵どんちゆうが様々の文化を伝えていました。二十三年にも朝鮮半島との文化的交渉はなお続いています。

此のように見て参りますれば、太子様は戦争を止めて國家民族の文化的交渉を中心としたもうことがわかります。その取り入れられた文化を太子様御自身ではどのようになされたかと申しますれば、法王帝説では太子様が能く涅槃のさとりの永遠にかわらないことや如來種性、縁覚種性、声聞種性、不定種性、無種性と言つて人間の性分を五種に分ける道理をお悟りになり、法華經の中の火宅三車の喻や権智と実智とを分けてある趣や、維摩經に説かれてある不思議な解脱の主旨に通達なされ、且また小乗佛教の經部とか薩婆多部とかの区別も御理解になり、其の上にまた中国シナの易經や老子や莊子の主旨、それから五經すなわち詩經、書經、易經、礼記、春秋にも通達しておいでになつたと記されています。また天文、地理の道にも通じていらせ

られたとあります。これは太子様の学問の広さと深さとを物語るものであります。當時の精神文化の主要なるものにはすべて通じておいでなされたのであります。今日太子様の三經義疏などについて委しい研究をなしている人の考証的研究の結果を見ましても、太子様が当時の大陸文化一般、殊に儒教佛教を中心として唐土の文学に徹底的教養を積ませられていましたことがわかります。

その太子様の徹底的教養は単に知識の獲得ということではなくつたようであります。知識は外へ広まるもの、智慧は内へ深まるはたらきという区別を致しますならば、太子様の生命は常に知識の問題を智慧の事に転ずる偉大な力であつたようであります。法王帝説に出ている夢殿の因縁物語は、その事をはつきりと示すものであります。

太子様の御心の中心には世の中の平和という問題が大切なことになつています。十七条憲法の第一条が明かにその事を示すのであります。太子様の御胸中に争いか和らぎかという痛切な問題がありました。それは馬子の問題であります。

馬子の大逆事件ということが太子様の中心の苦惱の問題となつてます。誅伐すべきか否かという大問題であります。当時の太子様の御立場としては武力などで誅伐なされるということは出来なかつたであります。またそれが

ことが一二ではなかつたといふのでありますから、太子様は痛切な問題のある度毎に三昧境に入つて解決を求めたもうたのであります。

## 二 苦惱の唯中に

お出來になつたとしても、平和を中心問題としたまゝ太子様が御誅伐をなさる筈がありません。そこで此の事が太子様の中心の苦惱の問題となつたのであります。此の苦惱を心の奥に持つて仏典を御読みになつたのであります。それで深刻な疑問をお持ちになつて、それを慧慈法師にお尋ねになつたことと思われます。单なる學問僧として慧慈はそれにお答することが出来ない場合がしばしばあつたのであります。そのような時に太子様は夢殿におこもりになります。夢殿の觀音様の前に端座遊されて此の問題に対する三昧境にお入りになつてその解決を求めたもうたのであります。苦惱の体験のどん底にあらせられた太子様の御心が仏典の精神とひゞき合うところを求めたもうたのであります。

帝説には太子様が夜夢に金人を見たもうと記されており、金人というのは仏様のことであります。太子様の苦惱の御心が仏典の深い精神にひゞき合つて問題解決のいとぐちが開かれたのであります。誅伐を否定して平和の解決を求めたもう太子様の御心に仏典の大心光がさしきめたのであります。千万年の末かけて日本國の平和を求めたもう太子様の御念願が叶う第一の門が開けたのであります。單なる知識では解けない平和の念願、現実の問題が智慧により解決の第一歩に向つたのであります。帝説によれば斯様の

用明天皇崩御の後、厩戸皇子として淋しく月日を送つておいでになつたのが、推古天皇の皇太子とならせられてからは御立場が非常に変つて來たのであります。四天王寺の縁起では一皇子としてあらせられた時に物部氏との軍におでましになつて、四天王の像を刻んで頭にいただかれたといふ事が伝えられていますが、それは後に作られた伝説であります。そこには「天皇の御心配も、物部の謀も、天皇の御心配も、天皇の御心配も」といふ傳説であります。そこで太子様は心の奥深くまことの道を求めて精進なしで、亡き御父君用明天皇の御追憶の裡に、心配の多い淋しい月日を送つておいでになつたことと思われます。それが境遇一転して推古天皇の皇太子攝政と定まらせられたのであります。これから太子様の御心配事も色々の問題もありまことに、太子様は聰明なお方でありますから其の苦惱についても敏感であらせられ、痛切にその苦惱を感じられたのであります。

太子様は聰明なお方でありますから其の苦惱についても敏感であらせられ、痛切にその苦惱を感じられたのであります。

ります。蘇我馬子と東漢直駒よまとあやのあたひこまとが崇峻天皇を弑逆し奉つたという事件は、太子様としてはおじ様を殺害せられたという関係ばかりでなく、日本国としての大問題として感ぜられたのであります。しかし太子様は刃をもつて此の問題を解決しようとはなされませんでした。実際太子様は馬子や駒を誅罰なさるほどの武力をお持ちにならなかつたかも知れません。併したといふ兵馬の權をお持ちになつてゐたとしても、刃を用いるという道を御採りにならなかつたろうと思われます。

阿佐太子の筆と伝えられている太子様の御肖像は大切なことを物語ります。美術の方の専門の方の申されますことによれば、あの御肖像の眼は遠くを見て同時に深きを見るという眼であるということであります。實に太子様の心眼は遠く日本國の千万年の後までを見とおしたもうたのであります。同時にこれを御自分の問題として深く見たもうたのであります。日本國の千万年の後までを見たもう時、此の問題は一二の權臣を誅することによつて解決の出来るものではないということを十分に深くお考えになつたのであります。

そもそも人間が深い心の問題に当面して、その曙光を見るまでには少くとも十年の歳月を必要とします。太子様は聰明なお方ではありましたけれども、日本國の苦悩の問題

られるという御体験でありました。此の太子様の強い感受性は日本書紀に出ている御歌によつても察し奉ることが出来ます。それは推古天皇の二十一年冬十一月のところに出てゐる御歌であります。  
級照るくわざらる 片岡山に 飯いい 飲え 臥くせる 彼そぞ の旅人たびと あわれ  
親無しに 汝なれな 生りけめや 刺竹さすたけ の君は や無き 飯に飢  
て臥せる 彼の旅人あわれ

此のような感受性をもつて深く感ぜられた国家社会の苦悩は儒教や道教で解決が出来るものではありません。儒教は天下國家の經綸を説き、老子や莊子の道教は自分ひとりの心を静めることを説きます。併し天下國家の憂を自分の問題として採り入れ、その深い解決を示す教は仏教より外には無いのであります。それならば太子様はその深い苦悩の問題を解決するためには、仏教の如何なる点に触れ給うたのでありますか。今まで残つてゐる最も確実な史料によつて考えて見ますすれば、法隆寺の金堂の釈迦像光背銘は、太子様の薨去以前において、王后・王子及び諸臣が太子様の御意願を承つて、淨土に登り妙果に昇らせたまえと念願せられてゐる事を伝えています。またその釈迦像は挾侍の薬王菩薩と相俟つて、法華經の薬王菩薩本品の中の次の二節を想い起させます。

を千万年の後までかけて見とおして、その解決の鍵を握りたもうまでには、十年余りの年月が必要であつたと見ることは不自然ではありません。そして如何なる道においてその解決の鍵を求め給うたかと言えば、それは当然仏教に求め給うたと考えなければなりません。我が日本民族は本来は単純であつて一徹であり、深くもつれた苦悩を解決する道などは持たなかつたのであります。昔の宣命などに現われてゐる明るく淨く直き誠の道といふのは単純明朗な心の產物であつて、なかなか善いことではありますか、複雑な心の苦悩を解く道ではありますか。上古の人は深刻に苦悩を感じるということは無かつたと思われます。

然るに太子様が当面し給うた苦悩は、時代の苦悩として国家の苦悩として深刻な苦悩であります。太子様は深刻にこれを感じ給うたのであります。太子様は心の奥底において此の苦悩に対する感受性を十分に御持ちになつていていたのであります。その事は太子様が晩年に側近の方に時折お洩しになつたという世間虚偽唯仏是真といふ言葉によつても察し奉ることが出来ます。如何ばかりその当時の国家社会の有様を虚偽と感じ給うたことであります。御自身を中心として此の世の中は虚しいもの、偽りなものといふことを痛切に感ぜられたのであります。その虚偽なる世界の中にあつて、ただ仏のまことばかりがしみじみと感ぜ

若し如來の滅後、後の五百歳の中に、若し女人ありて是の經典を聞きて、説の如く修行せば、此において命終りて、即ち安樂世界の阿弥陀仏の大菩薩衆の圍繞せる住處に往きて、蓮華の中の宝座の上に生ぜん。

維摩經義疏には仏國品の疏の菩薩の淨土に関する十事の問答の第七において大無量壽經の第十八願が引用せられてあります。是等によつて考えて見ますれば、淨土といふことが太子様の御心において終始一貫の大切な問題であつたことがわかります。太子様は何故に淨土を念願となされたのでありますようか。現在の苦悩を逃避しようとなされたのでありますようか。決してそうではありません。太子様は現世の苦悩の中の苦悩ともいべき立場にあらせられながら、決してこれを逃避したまわらず、堅に此の世を脱け出でて悩みの無い天上界に昇つてしまおうとは決してなさらず、悠々として横さまに苦悩の人生を歩んでおいでになつたのであります。太子様は遙かな彼岸の淨土に憧憬するといふ心持ではなく、此の娑婆世界に照徹する淨土の光を感じていらせられたのであります。菩薩の修行の段階を十地に分けてありますが、太子様の感ぜられた淨土といふのは、八地以上の菩薩に感ぜられる淨土であります。

それを冥合衆流更無異趣という言葉で言いあらわしておいでになります。これは煩惱の衆生の流れと一つにな

つて冥合して、決して自分ばかりは悟っているぞというよううな顔をせず、いわゆる和光同塵の態度をもつて此の世に処するということであります。それでこれはすがたや形を超えた無相の淨土とも言われる淨土であります。それ故太子様が淨土へ往生遊されたということは、そのまま此の娑婆世界へ還つて衆生を導き給うということになるのであります。此のような趣の淨土の感じを中心として、太子様は十カ年あまり大乗仏教に心をひそめ給うたのであります。太子様がいのちがけの御心持で日本國の苦惱を御自分のいのちの上に背負われたのでありますから、それはよほどの重荷であり、聰明でお心がしつかりしていらせられた

## 堂

## の

## 鈴

(一)

### 佐藤強三郎

夏の夕方、信哉は直江津の浜へ散歩に出た。五智の五如来に参詣し、親鸞聖人草庵の跡を尋ねて浜辺へ向つた。片葉の葦が風にそよぎ、佐渡が日本海にかすんでいる。シベリヤから吹いて来る涼風は心地よいものである。年老

いてから、信哉は夏は大ていこの町で過した。陽が沈んでゆくにつれて涼しくなり、海岸から一人去り二人去り、夜ともなれば急に淋しくなつて行くばかり。信哉も一度宿へ帰つて夕飯をすませ、一服して又浜へ出た。わざと人目を避け、静かな淋しい場所を選んで歩いた。丁度よい所に松が一本あつた。しばらく根元に腰をかけていたが、ふと、

と言えば「離して」とお藤はもがく。信哉は「静かに」とあたりを見たが、誰も見ていない。力強く抱きあげ、静かに岸へ上つた

「どうか落着いて下さい。ここでは、……どうぞ、私の宿へ」と、海水に濡れた浴衣を脱がせ、自分の浴衣を着せ、下駄を拾つて案内した。雨はだんぐり大きくなり、もうあたりは暗い。夕暗の中を二人は急ぎ足に、人目を避けながら、海辺の裏道を宿へ向つた。さいわい人に会わない。お藤はうなだれてついて来る。

途々信哉は思つた。「何事であろう。柏崎の有名な茶舗の御新造じやないか。あの評判の高い玉露や抹茶を売る堅氣の店、……自分は友人に勧められて、よく店へ買ひに行つたものである。向うでは知るまいが、こちらは、お藤さんを知つてゐる……と。

濡れながら二人が定宿に着けば、信哉の眼くばせて、すぐそれと察した番頭は静かな二間続きの離れへ案内した。信哉「私はお店を知つています。御遠慮なく、気楽に休んで下さい。夕飯をたべましよう」と注文した。お藤は頭を振つて、うつむいている

「アツ、あなたは、柏崎の……お藤さん！」

太子様でも、その重荷の苦惱はなかなかの御事であつたと思われます。維摩經義疏の第一頁に國家事業為煩といふ言葉がありますが、これは太子様御自身の心境として解釈しても宜しいであります。日本國の事を心の煩いとして背負つておいでになつたのであります。此の苦惱の問題は一朝一夕にして解決の出来ることでなく、聰明な太子様でも十年の歳月を要し給うたのであります。此の十年の間に太子様は此の苦惱ゆえに仏典に心をひそめ給い、時としては救世觀音の前において三昧に入らせられ、次第に御心が融けて和らいで無相の淨土を感じせられるようになり、日本國の苦惱の根本的解決の道が次第に明かになります。ここに十七條憲法が出現することになつたのであります。

が運ばれ、二人は静かに暗い海を眺めていた。時々客船の

燈火も見え、出入の船の気笛がかなしく響く。あれは北海道行の船であろう。又山の手の方から時々汽車の気笛がけたたましく鳴つて来る。後は静かである。

信哉「チヨソット帳場へ用があるから行つて来ます。」心配

なく、部屋で……」

と出て行つた。程なく帰つて来るや、お膳が出た。女中

はビールの栓を抜き、先ず信哉へつぎ、次に「サア、どうぞ」とお藤の方へ向けたが、もじょくしていいる。

信哉「こちらで自由にやるから」と女中を返した。

信哉「お腹が空いたでしよう。御遠慮なく、どうぞおあがり下さい。お家の方へは、私からよろしく申上げておきました。御心配なく」

先程、信哉は至急電話で、柏崎と連絡をつけた。そして、宿の主人には、特に注意して二人の動静は一切口外せぬ様にとかたく言いわたした。

お藤が食事もろく／＼出来ないのを見て信哉は「どうぞ隣りの部屋でおやすみ下さい」とすゝめた。お藤は「お先に失礼致します」と、その部屋へ行つたが、溜息をつき咳をして仲々寝つけない様子である。

その夜、信哉は一晩中、隣室の動静を、身体中を耳にして注意し、眠らずに用心して夜を明かした。

○  
午後三時頃、柏崎から、主人の一郎が興奮して來た。信哉は別室で一郎に会つた。信哉から、なるだけ遅く来てく

れ、と注意して置いたのであつた。が急いで來た。

一郎「家内はどうしていますか」

信哉「奥様は大丈夫、御無事ですか、御安心下さい。今

日は会わずに帰り下さい。御心配のことは十分お察し致して居りますが……」

とて、どうしても会わせない。そしてお父様に是非お目にかかりたい、と云つた。一郎はやむを得ず帰り、その夕方

老父は直江津へ來た。そして信哉と別室で会つた。

老父「ありがとうございます御座いました。何といつてお礼を申してよいやら言葉も御座いません。貴方様のことは御顧客様

からいろいろ／＼承つて居ました。

実は昨夜は私共心配して困り抜いた挙句、警察へ搜索願を出そうかと相談した程でした。もしか手遅れになつて万一死ぬ様なことがあつては、取りかえしがつかないと思ひ、もうすこしで警察へ行くところでした。行けば新聞には出る、出れば商売にさわる。私方では、どちらか

その様に氣を腐らせている所へ御電話で、お藤は助けて安全に旅館につれて來ているから心配はいらぬ、とのことで御座いました。まだ一度も座敷へ上つて頂いたこと

もない程なのに、こんなにお世話様にならうとは、全く

その翌日信哉は朝早く起き、二人一緒に御飯を食べ、海

へも行かず、宿でごろ／＼ねころんで、雑誌などを見たり、うつら／＼と居眠りばかりしていた。しばらくして信哉は、

ようしてくれ」とよく頼んで、夙飯も食わずに、グツスリ、午睡してしまつた。午後一時すぎに、ポカツと眼をさ

ますや、隣室を見て、……お藤さんが居るな……、と知る

紙をあけて、お藤に、

信哉「すみませんでした。寝過ぎてしまつた。何しろ眠む

くて、／＼」と笑つた。そして、ポン／＼と手を叩いて女中に早いとこ、そばを、そばを……』と注文した。

信哉「お疲れでしょう。樂にして下さい」

お藤「それほどでもありません。ありがとう御座いました」

申上げてあるから御心配なく」

信哉「お宅へは、良くお話して、私がお預りしていると、

とボソリ／＼話しながら、そばを食べたり、アイスクリー

ムを呑んだりしているうちに、お藤の氣も落着いて来たらいい。

申訳がございません。ありがとうございます。どうぞ今後共、何分よろしくお願ひ申上げます」

と平身低頭、頭から湯気を出して、盛んに扇子を動かしている。

信哉は、チヨイと出たが、やがてお藤をつれて來た。お藤はうなだれて顔をあげ得ない。軽く会釈した。老父はその方へ向き、

老父「お前疲れたろう。向うの方に別室をとつてあるからそこでゆつくり休みなさい。私も今夜は一緒に泊るからね。後から行くから、遠慮しないで休んで居なさい」

お藤「お先きに」と云つて素直に出た。後で、

老父「これには訳が御座います。恥ずかしながら、言わねばわかりませんが……。実は伴一郎が直江津の女と何で御座いまして、……御存じかも知りませんが……」

信哉「いやなにも知りません」

老父「大分評判ですが、その相手はお茶と活花の師匠です。そのお小夜さんとわりない仲になりまして、ハイ／＼：初めはそこへお茶を納めていたのでございました。その女は生別れの出戻りで御座います。師匠の外に趣味で素焼きを楽しんでいるそうですが、お茶椀、花瓶、盃など造りますが、それが素人ばなれをしているので、仲々高く売れるそうで御座います。

どちらからさきにのぼせたか分りませんが、私は多分向

うからだと思います。親の口から言うのもなんですが、

何しろ一郎は世間知らずの奴で、まだ二十七才ですが、あの女は三十以上らしいのでございます。そこで、何かのと、商売にかこつけては、直江津へばかり出かける様になりました。そしてだんぐり嫁との仲がうまく行かぬ様になり、嫁はいつも、泣きの涙で暮していました。子供が無いのでなお淋しいのでございましょう。

しまいには口論して嫁が里へ帰つたこともあります。私が行つて詫をしましたが、その実家と云うのが、昔

堅気の家でして、母親も実直な人でございます。

嫁が実家に帰つているうちに、どう言い聞かせて下され

ましたのか、しばらくして又店へ帰つてまいりました。

私共は婆さんと二人で、嫁にすまないと思い、気兼ねしたり、慰めたり、励ましたり、何呂れとなく大事にしました。所が婆さんはうまく行かぬもので、いくら私共が気を配つても、二人の仲がひた／＼しないので気が氣であります。そうこうしている内に、つい今度の出来事でござります。ホントに驚きました。そこを思いがけなく貴方様に助けて頂いたわけでございます。何と御礼の申上げようもございません。これも立派な御顧客様、佐竹様のお引合せがあつたればこそ、と不思議な御縁を喜

んで居ります」

と、何度も頭を下げて、尚色々のことを話した。

信哉「そうでしたか。御心配でしたでしよう。実は私は御宅とは深い交際でもないのでですが、あの嫁さんを一週間ほど、私と二人でこの宿で静養させて下さるわけには行かぬでしようか。私に少し考がありますから」

と言ふと大喜びで

老父「それは願つてもない、有難い話でございます。貴方様のことは蔭ながら佐竹様から承つていて、安心して居ます。どうぞ何分ともよろしくお願ひ致します」

と云つて、急に部屋を出て、お藤をつれて來た。

老父「私から今こちら様によくお願い申しておいたから、家のことは心配しないでしばらくこの宿でゆつくりと静

養しなさい。そうしなさい」と信哉の方を見る。

信哉「お父様が、ああ仰言るのですから……」

と言ふと、お藤は「私はお父様と一緒に明日帰ります」と云つて下を向いた。老父は真剣になつて、

老父「まあ居なさい。家の方は私が皆に良く話しておくから」としきりにすゝめるので、遂に嫁もうなづいた。

老父は翌朝早く信哉に「それでは何分よろしく願います」と云つて柏崎へ帰つた。その後で

信哉「心配なく保養なさい。お父様もあのようにおつしやつてやつていなさるのですから。今日は雑誌でも見て、

# 一

## 道 会 の 記

(二)

榊 原 德 草

部屋でゆつくりお休みになつたらどうでしよう」と自分から先に寝ころんだ。

東先生に、どうぞ御感想を、とお願いした所、まず梶井さんからどうぞと言われる。  
梶井老人は私の永い御縁の聞法の方である。東先生とも池山先師を中心に発刊していた「聖鸞」誌と共に深い因縁で結ばれている。誌の経済的援助をして下さつたのは梶井さんであつたし、誌の後半期の編輯は学生時代の東先生がやつて居られた。特に先師の追悼号は東先生が尽力された。久し振りに会われて、梶井さんどうぞ、ということになつたのだと思う。そんなことで梶井さんは、言葉少なになつたのがあつたが、池山先生から承つた只念佛はまことに深いものであること、眞面目に聞いていたことが此頃思われてくること、先生の仰しやつたお言葉のいくつかが思い出されること、など現在の胸のうちを感慨深げに述べられた。

次で石田十九三兄——曾ての下鴨の同信会の法友で、久

し振りに参会されたのだが、その動機は、この間、三晩も続けて亡妻の夢を見られたとのこと。この亡き奥さんのつま子さんと共に石田君は池山先生のお話をよく聞かれたのであつた。奥さんはお念佛を喜び、死病と知つてからは、身の廻りのもの押入れの中まできれいに掃除をして、もう仰向けにしか寝ておれなくなつた重い病いの床の前に、仕事かえりの石田君に居てもらつて、歎異抄を読んで貰つては、あゝ有難い／＼と喜んだ方だつた。そして動けない身体で主人の帰宅までは、病床に仰臥したまゝで子供の編み物を念佛と共に続けられて遂に往生されたのであつた。二十五六年前のことだつたが——その石田君がぞの奥さんの夢に催促されての参会であり、「つま子の夢を三晩も見てね」と云われた顔をみると、私は有難いつま子さんの昔のことがすぐ浮んでくるのであつた。

石田兄は、「私共二人はよく池山先先のお話を聞きに参つたものです。御著書も読みました。このように聞法を続

けましたが、さっぱり解りません。或る日先生におたずねすると、「歎異抄を、何邊もく、繰り返しく読みなさい」と言われたので、その通りやつて居りました或のこと、相変らず仕事から帰つて拝読してゐたが、『親鸞におきては只念佛して』の、『只』の所で、『只』となつたまゝあとを続けて読めなくなり、南無阿弥陀仏、くとお念佛のみとなり、あふれる、お念佛に遇うてこんな喜びはありませんでした。現在では喜びも去り私に残つているのは縁に触れては出てくるお念佛であり、その時々で色々の形でお念佛が出てくるのであります。池山先生の繰返し歎異抄を読めと仰言つたことのお蔭、先生のお蔭で、有難いことがあります。」と話して下さつた。

東先生のお話の大要是次のようにあつた。

久しう振りでこの会に参加した。池山先生は昭和十三年に亡くなられたが私が京都大学卒業の年であつた。京大医学部四年間、先生のお世話をなつた。亡くなれる前の三年間は先生のお宅に入りびたりであつた。それから暫く法縁に遠ざかつておつたが最近懐かしくなつて來た。東本願寺と近い関係をもつようになつたり、ラジオに講演にも出るようになつた。科学の世界に生きる自分は日々その世界の進歩を見ているが、文化の進歩、文明が如何に進歩発達

(これが教育ではないかと思う。大学へ行くと他の人々と差別することになる、自分が偉くなつてくる。だが差別でなく偉くなるでなしに、教育に徹すれば学者になれなくなる、「煩惱具足の人間」にいよくなつてゆく、これが眞の教育と思う。

池山先生に遇うたことは誠に有難いことである。外国に行つて世界一流の人物に遇つてみると、その中にはノーベル賞受賞者もあるが、先生程の人間にはまだ会わない。先

生はずばぬけて偉大である。すばぬけて人生を創造したお方である。池山先生に遭うたことは有難いと思う。

もうじきに五十歳になろうとしている私であるが、そういう方向の書物を拝読し、大学を退く日がきたなら、その世界に生きたいと思つてゐるところである。

城さんのお話はこうである。

昭和三十三年に白井先生のお勧めで始めてこゝへやつて來た。そしてこの会にも毎年参らせて貰つてゐるが、西元宗助兄、川畑愛浩兄などは熊本の高等学校同窓であり、西元兄は先輩であることがじつて知れた。因縁というものを感じたことであつた。念佛の真意が仲々解らない。一昨年の一道会で大字佐平治さんとお会いしたが、氏は近角常観、常音両先生に聞法されたが両先生御生前中はどうしても判らなかつたが、御往生のあとで夢のうちのお話で坊が明いたと言われた。それから「慈光」誌の中に出でくる近角先生の講話を心にかけて読んだ、又、佐藤強三郎さんに聞いた、塚口の御親戚の所へも伺つて佐藤さんに直參したがわからぬ。老母が八十八才の高齢で昨年亡くなつたが、その母が生前、私の診療所の柱をせつせと毎日拭いて、今でもピカ／＼光つてゐる。この柱を老母の亡い今見ると母のことが思はれてくる。今迄は自分のことばかりで

生きていた私だつたことが少しづかつてきた、母は自分でなくてこの子供の私の為にセツセとやつていた。八十八才の老いの身になつても私の為にセツセと柱を毎日拭いていたことが思はれてきた。その話を佐藤強三郎さんに話したら、「そうだ、お母さんは、たとえ輕蔑されても嫌われてもあんたのために一生懸命なんだ」と言われた。少し解りかけたようだ、私は橋慢々々、だが、それがどうなるのだろうか?、今日はこれを花田先生に聞こうとついでやつて來た。それから井上善工門さんの「慈光の旅」を拝讀しているがその中に善巧方便、善巧方便と出でている、これがこのごろ心に留る。

城さんは右のよう、食い込むような例年の求道の姿をことしも熱心に繰り広げて下さつた。

中井玄英先生のお味わいは次のようにあつた。

白井先生の求道のお話を承つていて、近角常観師は同じ話を繰りかえしていわれたという。このような先生は段々少なくなつてくる。私は学生の時にハイネの詩の、「教師は川の中の岩である、流れる水は次々に流れ来り流れ去つてゆくが、岩は同じ所を動かない」といつた意味のことを読んだが、現在教師をしていて深く思はせられる。私には皮肉と思えてくる。法話会でも同じ話をしたら飽かれてしまつても人間は進歩しない。犯罪は返つて文化の進歩に正比例して増加するのみである。我々の周辺は住み良くなる筈なのに少しもそなつてこない。これを憶うと太古の人間、古代の人間の生き方の方が現在よりもつと人間らしい生活を営んでいたと思う今日此頃である。人間は罪と煩惱の消え去らぬ所がある、そういう所に救われねばならない大事なことがあると思う。私に与えられているのは仏の慈悲である。宗教無しでも生きてゆけるようになつたらと、皆が努力しているのだろうが、結局、宗教によらねばならないことになつてゐる。私は三十年間、小さい事を研究している、本を読んだり、実験をしたりしているが、それらを努力し重ねるほどいよく解らなくなつてくる、これが科学の世界である。教育は人間を善くすることに努めている。しかし人間は善くならないという自覚を深めることができることになる、自分が偉くなつてくる。だが差別でなく偉くなるでなしに、教育に徹すれば学者になれなくなる、

まう、だから同じことがらでも変化させて話す。蓮如さまは、新しく聞けと仰言る。私は今「自照」誌の編輯をしているが、同じ原稿を少くとも編輯から校正、刷上りまでは三辺は読む、四辺目になると完全に駄目になる。今日のお話は誠に感銘深く拝聴した。

次ぎに井上先生のお話を伺つたが、その前に、斎藤さんは、こういう会に初めて参會して信というもののうちに熱いものを感ぜしめられると謹厳に感懷を述べられた。井上先生は斎藤さんの感話をそのまま受け、斎藤先生は哲学を担当していられ、大学時代には田辺先生の弟子として勉強され又、久松真一先生の禅の道場にも入つていられたおかたであるが、先生は親鸞の教を聞く当然のお姿と思つて居ると、紹介と願いをこめてお述べになつた。

そして次のようなお味わいを話して下さつた。

白井先生は只今、甲斐和里子先生の

ともしひをたかくかかけてわがまえを

行くひとのありさよなかの道

を挙げられたが、これには同じ和里子先生の対句がある

といつて、次の歌詞を朗唱された。

この道をかく歩みつゝ来よかしと

のこせしあとの深さ大きさ

さる。宗教的体験は、吾々が攝取の中に開かれてくるもの、出合うもの、慈悲に直面する事実より外にないと思う。光りを浴びる喜びを経験したお方があるが私には鮮かな経験はない。只、仏の慈悲に出合うことが動かぬ所である。歎異抄の後序の中に、信心の一異についてのことが出てくる。親鸞聖人が善信の信心も御師匠法然上人の信心も一つである、との仰せに他の勢観房・念佛房などの面々が、異議を申立てる。事の仔細を遂に御師匠様の前に申上げての結果は「源空が信心も如来よりたまわりたる信心なり、善信房が信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり、さればたゞ一つなり、別の信心にておわしまさん人は、源空が参らんずる淨土へは、よも参らせたまい候わじ」との法然上人のお答であつた。私達には、こうならねばいけない、あゝならねばならない、と思うことが出てく  
る、そして共通一様のレツテルを欲しくなるが、そうでなくて、各々異なるいのちに溶け込む仏のお慈悲が一つである、こちらの色合いは種々異なる、こうならねばいかんといふようなその人の信仰について是非を論ずること、「淨論」のところには諸々の煩惱起る、智者厭離すべきよし……」  
池山両先生は私共と違つた鋭いものであるが、しかし私共のお念仏と一つである。

(松本先生の光明のお話が、白井先生から井上先生にまで感懷があとから、あとから生まれてきて、今日の一道会は一連の道光が、果てしなく、黒闇の内に通うてくる趣であった。池山先師の無碍の一一道の会、まことに有難いことであつた。)

井上先生は御自身と池山先師との関係から次のようにお話を続けられた。

私は池山先生には三度お会いした。それは昭和七年で私の学生時代であった。にこやかに演壇を歩かれてお話ししさつたあの歩く恰好、そして「親鸞におきては……」ジャ私も……」の御姿がいまでも眼に残つてゐる。活き活きと残つてゐる。花田先生も先生が京大の学生の時に信仰の告白に来られたことがあり、そのような御縁がこの会との深い御因縁となつていてことを思はせられる。池山先生は、歎異抄を読むお方でなくして、歎異抄がそのままお姿にとけてしまつて居られた。で歎異抄は私のものになるものであり、読む本ではない。

白井先生は先程、近角先生に求道されるお話の内で「鈍感な私は」と仰せになられたが、そうするとこの私など鈍感どころでなく、「無感覺な私」であつて、未だに飛び込む形などない奴である。

然し、仏の慈悲は、その際しない攝取の内に受取つて下

次で大字佐平治さんのお話を承つた。大体はこうであつたと記憶する。

池山先生が京都の大徳寺にお住居の時、近角常音先生のお伴をして伺つたことがあるが、これが最初で最後の御縁である。それからずつとたつて、池山先生の御往生をお会いするため東で知り、丁度九州の有田様と近角先生にお会いするため東上する時だつたので、御葬式の当日、確か重信会館の御靈前に参拝して東京へ行き、常觀先生にお話すると「君達が代つて御会葬してくれたわけだね」とおつしやつた。

いま白井先生から、近角大先生から叱られたお話を承つた。昭和初年に初めて大先生にお会いし、五六年後、何程聞いても、「可哀想だの仏の心」が解らぬ。「信界建現」

誌には福島政雄先生のお喜びの話がでているが、先生ははじめだからだ。そう思つて或るとき上京して大先生に、まじめにならねばと思うが、なれないことを申上ばたところ先生は「眞面目になれと誰が言つた、君と同じことを今朝も佐藤が言つてきて帰つた、君も同じか!」。私は椅子を立つて驚いて逃げて帰つたことありました。その晩、求道会館の横の宿屋に泊つて初めて佐藤強三郎氏と会い、互にお話を交した、眞面目になれぬで叱られたこと、忘れられぬ有難いことである。

仏のお慈悲を頂こうと常觀大先生に二十年、続いて常音

先生にも昭和二十年に御往生まで聞法したが判らぬ。三十年間両先生に聞法したが判らぬ。常観先生からは「また間違い、また間違い、それだから、お呆れないお慈悲でないか」の御自督を、常音先生からは「我慢のやまぬお前が可哀想である」の御自督を承つたが判らぬ。常音先生にお別れしてからは聞法の師がない、頼るの方のない愁しい日時の十日程たつた或る夜、夢に常音師とお会いした。その夢の有様をいうと、——ある座敷へ私が参る。常音師が坐られてる。生前のお姿、先生はツト立つて土間に下り卒倒され、私が抱いて坐敷へ帰る、先生を害しようとする二人が現れる、これは私の昔仲間である、弟が傍にいるので曲者の処置を命じて私は先生を抱き数丁歩いて或る家の前に難を避けた、その時、師は昏醉から醒められる、私はホソとした、家の横の一段高い所へ師を上げ、立つて頂く、私は下からお抱え申す。すると師は、上方から「大字君、生きているということ、人を救うこととは両立せぬが矛盾はない、第二十二の願があるからな」。やくざの曲者二人が又来る、そこへ行つて、今日だけは相手にするなどいつて、また元の所へ戻つたが師の姿は無い。——この夢は三十年の聞法以上に心に焼きつけられました。第二十三の願を拝読して見たが頂けない。数日考えぬいて、或る日友人の宅に泊り、そこの本棚の亀井勝一郎氏の「親鸞」を拝

読し二種の廻向のところを頂いてみると、第十七願、第八願、第十一願および第二十三願のことが書かれており第二十二願は還相廻向の願であることがわかつた。それからは常音先生が夢の中で、二十二の願があるからな、と仰言つたこの還相廻向のあることを心の中で思つめていた。ある時、新潟の佐藤強三郎氏を訪ねた、こゝを訪ねると近くの聖人御流罪の地の庵室へ参詣する例になつて、二人して参り聖人の御影の前で佐藤氏に夢の中の「二十二の願があるからな」との話をして還相廻向のあるところを心に念じて、いる旨を述べた。すると佐藤氏は「何を言つてゐるのか君、夢に現れられた先生、それが還相廻向だ」と。これから私はわからぬが苦にならなくなりました。

一身上のこと、将来の生活、仕事のこと、実際問題の上に御心配して下さつた両先生、いついかなるときでも御相手下さつた、その御親切は限りがありません。仏に遇わせて貰つていて、自見を押立てゝいた私で、何とも申証ないことであります。

(大字さんの咄々として咽を塞らせ涙を押えてのお話には一同深い感銘を覚えました。——こゝで夕飯と一先ずくつろぐことになる。)

夕食を頂き乍ら、今迄の緊張から離れて暫く休息してからと思つて居つたところ、岡邦敏先生が、左のよう御挨拶をして有難いことであつた。

それから暫くして東先生は池山先生を評して先生は二刀流であつた、先ずニーチエとかゲーテのファウストと真宗、次ぎに信仰となつてくると「歎異抄」。これは宗教のお話は宗教的術語があつて入門者に邪魔になるとの城さんの疑難に対してであつた。東先生は又、歎異抄は第一級のものがばかりだから、第三級第三級のものを、もつと欲しいものだと云われる。

白井先生は、誰かの話に対し、私は先生方に生涯逆いてしまつて、恩に背き、義に違う、ことを思つて、「自照」に書き出している、と感慨深くのべられる。

右のような誠に有難い御述懐をこめた御挨拶があり、白井先生はこの述懐に、そのように罪業の深さを知らされるのは御慈悲のお照らしによるのでなきや、と応えられ、また確とそれが自分に働くのは浄土へ参らせて頂くその徳と連関していることを説かれるのであつた。又松本先生は不

松本先生は、また、昨年の三月に谷川徹三氏の「近角、円空、三木清」の講演を、東京本郷の大谷会館で聞いたが、谷川先生が講演の中では、自分は一高在学中、人生について煩悶して自殺を計つたが、思い止まつて本郷求道会館

に入舎を思ひ立ちお願いに行つた所が近角先生が出てこられて断られてしまつた。再三の願いに先生は渋々と入舎を許されたが、二三ヶ月して、そのとき余り断乎と断られたので理由を先生に尋ねた、すると近角師は「あなたが来る前に、一人やつて来て暫く入舎してのち自殺した、そのことがあつたので断つた」と言われたそうである。谷川氏は入舎後の煩悶の深まる或る時、底も知れぬ深淵に自分が落ちて行くその時、底なき深淵から大きな手が差し延べられていましたと気づいたと。このお話のとき、谷川先生は涙で講演が続かず、約十分間程も感激の涙に嗚咽して居られたという。そして「若し親鸞と近角なくば今日の吾なし」と呼ばれたとのことである。又も一つ求道会館入舎後、近角

先生の奥様について感じたことを話された。それは、或る日曜奥さんは女中を呼んでいた、女中の名は千代だつたが、仲々女中が応えない、奥さんは千代、千代と九邊か十邊呼ばれたがその呼ぶ声の調子が、最初から最後まで乱れず同じ調子だつた、これは唯事ではないと思つたそうである。吾々だつたら段々と荒くなり怒りの声に変るものなのに、そう思つて先生御夫妻の、恰も聖人と恵心尼公の御生活と軌を一にする御家庭を感じたとのことである。

また松本先生は池山先生について云つた。

京都の先生の或る会の時、頭道会館へ先生を御送りする

宇野柳子さんは、結婚前に聞法の為に女教師の家に預けられた、里の家は仏法の深い家だつたから、そうさせられたのであつたが、死と一緒に如何したらなれるか、これが解らなかつた。結婚後座談会を開いたり聞法を続けたがスッキリとした安心が得られない。その時の先生が尊かつた。そのようになりたかつた、その先生に進められた書物が多田鼎先生の「みどりご」だつた、その中で多田先生は、そんなんに自分は尊い者でないと教えられている、先生にお会いしたいと思つた時にはもう御往生だつた。それから著書の中出てくる白井先生に御縁を求めるようになつて、「の会へ参るようになつた。そして「みどりご」から「慈光」へと導かれ、近角、池山両先生の御縁に会うようになつて、大変有難く思つて居ります。

(以上、一道記を、かなり詳細に残したい念願から書きはじめたのだが、思うように状景を表わすことができませんでした。今年のように、始めて帰られる午後七時迄これまでの光景に照り映えた会はなかつたと思い、洵に有難い今年の一一道会でありました。聖人が「念佛興業、盛んなり」と和歌を以つて仏を讃嘆しているが、先師の御往生を遙かな彼方にへだてるほどに、念佛興業、こゝもまた盛で

のに、その時分だから人力車でお送りしたが、車夫が「今のは、たゞの人でない」と。

#### 加藤氏の述懐。

去年の一会道に花田先生は御父君の御年忌を當まれ、父と別れて愁しいことを申されたが、自分も父と別れて、もう六年すると御年忌が来るが同じ感じである、先生の昨年のお話を思うこと頻りである。自分は城さんの話を聞いて自分も自己本位で、自分勝手なことばかりで念佛にすがつていることを恥かしく思う。全く自己本位しかない自分がわかつてくる。

福本慶子さんは、真宗信仰の家に生れて、小さい時から仏法になじみ、仏教の専門語で母や皆さんから育てられてきたが、今子供を育てゝいると、自分の業報に吹きまくらされているわけで、何もお念佛なり仏教の空氣に染む手だてをしてやらない。ひとりは基督教会へ行くようなことになつてゐる。それで家に居ると子供の上のことで種々考えることが多いが、結局、自先の自分の業報ということに帰つてきて、子供のことを心配することは、自分への御催促と思う外はない。

あると、喜びたいのです。

その夜、三人の法友が泊られました。一人宇野さんは早くからやすみました、明日のお勤めのためです。松本、東の両先生と私とは午前一時半まで、昔の聖鸞寮時代、蓮華谷時代のあれこれを、横になつたり胡坐に崩して坐つたりして、話はつきません。誠に有難いことです。今日で一週間目になりますが、未だ感激を小妻と談り合つたりしています。釈尊が成道後七日間は、十二縁起を順逆縦横に観察されたと伝えます。お念佛の法雨に湿つたわが煩惱業報のあれこれやが、有難い／＼となつてお念佛に帰します。何かそんなことが思われて参ります。

来年のこの会まで、いのちは、業報は、定め難く知り難きこの希いではあるが、身体を先ず大事にして、そう思つております。)

(三六、十一、五)

#### 御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会講話会

新市電郊通り一丁目下車東へ一丁半  
毎月廿四日午前・午後法話会。昭和区小桜町教西寺。  
市電御器所通下車。

おことわり



あとがき



「帰命の一念」の近角先生の御講話は、二回に分けて頂きました。二回目は撰取のころを述べて頂いて居ります。真宗を中心となされて下された蓮師の中心問題をいよ／＼仰がしめられます

「堂の鈴」の佐藤強三郎様の原稿は本月号

から頂くことにいたしました。永年心の底に藏して居られたものを吐露して、信の指針を具体的に知らせて頂き得ますことあります。

「一道会の記」は榊原老師が刻明に記録して下さいましたので不参者も、当日の模様をあり／＼と浮べられ、一人なつかしく有難いことであります。本年は廿五年忌となるち生きてまします。皆様の御参会を只今より御待ち申して居ります。

太子讃詠 福島先生「心光のあと」より  
とこしへの無相の淨土に聖徳の皇子の御いのち生きてまします。  
悲しみのことある毎に國民は聖徳王を恋ひ仰ぎけり  
虚偽の世に仮のまこと身にしめて聖徳王は生きたまひけり

御子大兄みおしまもり身を捨てて國のいしづへかためましけり

二月号が千種印刷所に入學試験問題の印刷が殺到し、一ヶ月もおくれまして皆様に御心配をおかけ致しました事をお詫び申上げます。引続き三月号も少しおくれますが御諒承下さい。

編集部

定価一部	二十五円(送共)
半年	百五十円(送共)
一年	三百円(送共)
名古屋市南区駄上町二ノ八八	
編集・発行人 花田 正夫	
名古屋市千種区千種町馬走二八	
刷 人 本田 政雄	
名古屋市南区駄上町二ノ八八	
發行所 慈光社	
振替口座名古屋一〇四七〇番	